

【原著】

膀胱攷——小便製造理論の検証——

Some new findings concerning Pang guang

小高修司

KOTAKA Shuji, M.D. & Ph.D.

『素問』靈蘭秘典論第八の「膀胱は、州都の官、津液 焉（こゝろ）に藏する」の「津液」に関しては諸説有り、その義を明確にしないものが多く、『素問攷注』の森約之注の如く「小便」やそれに類するものと考える場合もある（1）。本論攷の契機は、何故に通常の津液の意味が明確にされないままに本条文の解釈が行われたり、或いは通常の津液の字義と異なる解釈が通用しているのかに疑義を感じたことにある。

また西洋医学的に小便を作る臓器としての腎臓のイメージが強いためか、中国医学における「腎」概念の中にも泌尿器（つまり小便製造場所）としての働きがあると考えがちである。腎を含めて膀胱・胞・小腸・三焦などの古典における概念を検証し、具体的な小便製造との関連を探る。

なお『素問』は顧從徳本『重廣補註黄帝内經素問』（天宇出版社、中華民國七十八年、台北）、『靈樞』は明刊無名氏本『新刊黄帝内經靈樞』（内藤湖南旧蔵）を底本とする日本内経医学会一九九八年刊本、『金匱要略』は元・鄧珍本、真柳誠・小曾戸洋監修、燎原一九八八年刊、『諸病源候論』（巢元方六一〇年刊）は宋版、東洋医学善本叢書第六冊、東洋医学研究会一九八一年刊、『外臺秘要方』（王燾七五三年頃刊）は宋版、東洋医学善本叢書第四、五冊、東洋医学研究会一九八一年刊、『脈經』（晋。王叔和）は仿宋何大任本、東洋医学善本叢書第七冊、東洋医学研究会一九八一年刊、森立之著『素問攷注』は日本内経医学会、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所共編一九九八年刊本、澀江抽斎著『靈樞講義』（上下）は郭秀梅等校點、學苑出版社二〇〇三年刊、を用いた。

一、州都について

改めて『素問』靈蘭秘典論第八の条文を検証する。

膀胱は、州都の官、津液 焉（こゝろ）に藏する。氣化して則ち能く出づ。

「州都」とは『爾雅』釋水によると、

水中 居す可きは洲と曰い、小洲を渚と曰う。

『爾雅義疏』によると

水中の地名洲は説文に州に作る。…渚は當に渚と爲す。説文引きて小州は渚と曰うに作る。

で、洲は州で問題ない。渚は都と本来別字であり、異体字と見なして良いのか疑問は残るが、書伝の過程で何時しか「膀胱は州都の官」になったということは、あながち無理な推

測では無かろう。つまりベニスや蘇州、徳川幕府時代の江戸の如く、水運水利が発達した街を意味しており、通常の津液概念に連なる語彙である。ただ都には『水經注』涑水に

水澤聚まる所、之を都と謂う。

と水たまりの義もあり、これも字が混淆した理由の一つかもしれない。

また州・都には、『廣雅』釋地に見られる夏王朝の土地制度の名前や『管子』度地の

故に百家を里と爲し、里十を術と爲し、術十を州と爲し、州十を都と爲し、都十を國と爲す。

のような関連も見られる。

二、膀胱が蔵する津液とは

『素問』經脈別論篇第二十一の

脾氣は精を散らし、上りては肺に歸し、水道を通調し、下りては膀胱に輸し、水精は四布して、五經は并び行る。

を併せ考えると、膀胱は津液の流れに大きく関わっていることが解る。つまり脾胃において水穀の氣より産生された津液は、その循環を調整している器官として、上半身には肺を、下半身には「膀胱」を想定したと考えられる。『春秋元命苞』の

膀胱は肺の府なり。肺は斷決し、膀胱は亦 常に張りて勢い有り。故に膀胱は難しきを決するなり。

も、肺と膀胱の関連を説くものとして興味深い(2)。

また『諸病源候論』膀胱病候を見ると、

五穀五味の津液は悉く膀胱に歸す。氣は化して分かれて血脈に入り、以て骨髓と成るなり。而して津液の餘は胞に入り、則ち小便と爲る。其の氣 盛んにして有餘爲らば、則ち病は胞を熱し、瀦にして小便通ぜず、小腹は偏りて腫れ痛む、是は膀胱氣の實と爲すなり。則ち宜しく之を寫すべし。膀胱の氣不足ならば則ち寒氣之に客し、胞 滑かにして小便數にして多なり。面色黒きは是 膀胱氣の虚なり、則ち宜しく之を補せ。とある。前半の生理についてであるが、「五穀五味の津液は悉く膀胱に歸す」は、上記した『素問』經脈別論篇第二十一と併せ考えれば意味がよく分かる。『諸病源候論』虚勞小便難候には

膀胱は津液の府、腎は水を主り、二經共に表裏爲り。水は小腸を行り胞に入りて洩便と爲る。今 胞内に客熱有れば、熱に則り水液澀となるが故に小便難し。

と、小腸が水穀を分別した後、水は胞に入り小便となる。胞内に熱が客していれば、熱のために排尿困難になる。これはいわゆる膀胱炎の状態に似ており、「胞」が西洋医学的な膀胱の概念に近いことが明記されている。

三、膀胱と胞の関連

ここで胞と膀胱の関連について、より深く考える必要が出てきた。そこで『諸病源候論』卷之十四「胞轉候」を見ると

胞轉は是 胞屈辟して小便通ぜざるに由り、名づけて胞轉と爲す。其の病状は齊(臍)下急痛し小便通ぜず、是なり。此の病は、或いは小便應に下らんとするに、便ち

強いて之を忍じるに由り、或いは寒熱迫る所爲るに由る。此の二者 俱に合し、水氣上に還り、氣 胞に迫りて（丁光迪校注本では「此の二者 俱に水氣を令て胞に還らし」と正す）、胞を屈辟せしめ充張するを得ず、外水入らんと應じるに入るを得ず、内の洩は出んと應じるに出るを得ず、外内相壅塞し、故に通じざら令む。

膺下の急痛と尿閉を主症状とする「胞転の病」は、小便をしたいのに我慢したり、寒熱邪が合わさったりして、胞が屈辟することにより生じることが説かれている。

この胞転の病は、「尿意切迫感・頻尿や下腹部や会陰部の疼痛を伴い、感染や特異的な病理所見を伴わない膀胱の疾患」と定義され、中高年の女性に多発する国際的な難病である「間質性膀胱炎」（或いは「過活動膀胱」との関連が考えられる。閑話休題。小便製造と関わる部分は「水が小腸をめぐり胞に入りて小便となる」「膀胱より胞に入りて小便となす」「胞を使って屈辟す」がポイントと言えよう。

『素問』氣厥論篇第三十七に

胞 膀胱に移熱すれば、則ち癰し溺血する

を読めば、胞と膀胱は明らかに別の存在である。また『靈樞』五味論第六十三に

酸 胃に入れば、其の氣 澀にして以て收むれば、上りて兩焦に之くも、出入すること能わざるなり。出でざれば即ち胃中に留まり、胃中和して温なれば、則ち下りて膀胱に注ぎ、膀胱の胞 薄くして以て懦らかく、酸を得れば則ち縮繕して、約して通ぜず、水道行らず。故に癰す。

この条文では膀胱の一部に胞があるように思える。そこで、楊上善は胞Ⅱ皮と注し、馬蒔は「膀胱は胞の室為り、胞は其の中に在り、其の體は薄く、其の氣は懦かし」と、胞を膀胱の中にある部屋と見なしている。これに対し張介賓(3)は胞Ⅱ脬Ⅱ膀胱と見なす。森立之は『素問攷注』で胞Ⅱ膀胱説に反対している(4)。なお「癰」は意味として「淋」の古語である(5)。

さらに『素問・痺論』第四十三の

胞痺は、少腹 之を按じ旁光（Ⅱ膀胱）内 痛むは、湯を以て沃ぐが若し。小便は澀り、上りては清涕と爲る。

「少腹旁光。按之内痛」は倒置の文法に従って訳した。胞痺と言いながら、膀胱内が痛むというのは、胞と膀胱を同一視しているか、胞を膀胱内の存在と見なしているかであろう。ところが『黄帝内經太素』や『全元起本』では「内痛を兩髀に作」っており、これを参看すれば、ここは「少腸膀胱 之を按じ、兩髀は湯を以て沃ぐが若し」となり、意味が全く異なることになる。楊上善の注では、

膀胱及び足太陽に耶（邪）客すれば、膀胱中 熱し、故に之を按じれば髀 熱く、下れば則ち小便に澀 有り、上れば則ち鼻より清涕出ずるなり。

という説になる。だが馬蒔は『素問』の条文を採って、

胞は風寒濕氣を受けて痺と爲る。則ち少腹膀胱は之を按じれば内痛み、湯で沃ぐが若く、小便は澀るなり。胞痺と言は、大約是 膀胱の病爲るのみ。

と、熱感を伴って痛むのは少腹膀胱であるとす。胞痺も痺証の一種である以上、基本的には風寒湿の邪が原因であるのは当然である。であるならば何故に熱感を伴うのか？ここでは久病を言っているわけではないので、邪久しくして化熱したわけでもない。とすれば『黄帝内經太素』などの条文の方が正しいのではないか。湯を濯いだように熱いのは膀胱

經の気の流れが停滞した結果であり、その部位は兩髀（もも）と考えるべきであろう。そしてこの邪熱は胞内にも入り尿閉を起こしたのであり、それ故に「胞痺」というのである。いちおう胞の位置など本条文に関連する事項について諸家の説（6）を記しておく。

『諸病源候論』に戻る。虚勞痰飲候に

勞傷の人は脾胃虚弱にして水漿を剋消する能わざる故に痰と爲るなり。痰は胸膈に涎液結聚し、飲は膀胱に水漿停積するなり。

と、痰・飲・涎・液・水・漿の区別が明記されている。また虚勞小便利候には

膀胱は津液を蔵するを主り、腎氣衰弱すれば津液を制する能わず、胞内虚冷により水下るを禁ぜざるが故に利するなり。

と、これを上の条文と併せ読むと、膀胱は津液の貯蔵場所であり、そこに水漿が停積すれば飲邪となる。いっぽう虚勞状態で頻尿になるのは、胞内が虚冷するためである、と膀胱と胞の役割が異なると考えられる病態が記されている。

さらに熱病小便不通候を見ると、

熱が膀胱に在れば小腸の流れは熱盛んとなり、則ち脾胃は乾き津液少くなるが故に小便通ぜざるなり。

と、小腸は膀胱の熱の影響を受け、そのため脾胃が乾き、気の産生が減り、結果として津液も不足し、それが乏尿を来すと理解できる。津液の貯蔵場所である膀胱の寒熱状態が、水穀を分別する小腸に影響し、更に氣・血・津液を作り出す脾胃にも逆伝として影響するという図が見られる。このように「膀胱」の意味するものが解剖学的に限局された場所としての存在ではなく、少なくとも解剖学上の膀胱を意味していないことが示唆される。

四、「厥氣 膀胱に客すれば、夢に遊行す」とは

ここで膀胱の働きを探るために視点を変える。『靈樞』淫邪發夢第四十三の条文を検討する。

厥氣 心に客すれば則ち夢に丘山に煙火を見る。∴膀胱に客すれば、則ち夢に遊行す。

∴胞腫に客すれば、則ち夢に洩便す。

『靈樞講義』によれば、張志聡の意見を引き「ここでは正氣の不足を論じており、厥氣とは臟腑間に虚氣厥逆するをいい、客するとは臟腑の外に薄るをいう」と記す。膀胱に関しては、馬蒔と張介賓の説を引用しているが、いずれも膀胱経の走行と絡めて「歩く」ことを説くのみである。

いっぽう膀胱と直接歩行と関連する条文は『黄帝内経』には見あたらない。とすればこの条文を足太陽膀胱経との関連から歩行の夢を見ると考えることには疑問が起ころ。

ここで『金匱要略』五藏風寒積聚病脉證并治第十一に見られる条文

心氣虚すれば、其の人則ち畏れ、合目して眼（眠）らんと欲するも、夢に遠行して、精神離散し、魂魄妄行す。陰氣衰えしは癩爲り、陽氣衰えしは狂爲り。

は、「遠行」と「遊行」の違いはあるが検討すべきであろう。この条文を踏まえれば、遊行が単に歩き回ることを言うのではなく、夢遊状態を指していると考えべきであることが解る。この条文は、多少の字句の違いはあるが、『脉経』心手少陰經病證第三に、より詳しく見られる。則ち上段と同様の条文に引き続いて、

五藏は魂魄の宅舎にして、精神の依託する所なり。魂魄が飛揚するは、其の五藏が空

虚なり。即ち邪神が之に居し、神靈が鬼を使い之を下す所なり。

この『脉経』には、他に膀胱足太陽経病證第十に

厥氣は膀胱に客して夢に遊行す。

と、『靈樞』と同じ条文が見られる。『脉経』には「遊行」と「遠行」の両方が用いられており、遠行は文字通り遠距離の旅行を意味する用例が他に多出しており、遊行と意味が異なるように思われる。そこで念のため「遊行」を諸子百家など古典文献で検索すると、釈迦、孔子そして扁鵲などの諸国偏歴・行脚の意味合いで用いられているが、唯一『太平経』の卷一百五十三に

古今の要道は、皆 守一を言う。長く存す可くんば老いず。人 守一を知り、名づけ
て無極の道と爲す。：常に合して即ち一と爲し、以て長く存す可きなり。常に精神離
散を思えば、身中に聚まらず、反つて人の念に随わ使めて遊行せ合むるなり。

と、「精神離散」を含め『金匱要略』や『脉経』と近似した内容が説かれており、厥氣が膀胱に客した場合と同じく、夢遊病状態に対し「遊行」の字句が用いられている。このことから遊行と遠行という両字句の用例は同意と見なせるように思われる。とすれば、共にいわゆる夢遊病状態を表す場合があると見なせるが、その病因は一方は「厥氣が膀胱に客する」であり、他方は「心気虚」である。さて心と膀胱の関連を如何に考えるべきであろうか。

『靈樞』に書かれているように、厥氣が臟腑に客するためには、基本的に臟腑の正気が不足している必要がある。心気虚（＝心気不足）が有れば精神離散状態を来すことは十分に理解しうるので、結局は問題となるのは膀胱の虚証と遊行を如何に関連づけられるかである。もちろん膀胱と臟腑関連で関わる腎の持つ精神との深い関わりを考慮して、関連づけることは可能であろう。だが直接的に膀胱と精神を結びつける考えは『黄帝内経』を含め古典には見られない。そこで考えるべきは次の条文である。

『靈樞』決氣第三十の

腠理 發泄し、汗出づること溱溱たる、是を津と謂う。：穀入りて氣滿ち、淖澤して骨に注ぎ、骨は屈伸を属ね、洩澤すれば腦髓を補益し、皮膚は潤澤する、是を液と謂う。：津脱とは、腠理開き、汗大いに泄れ、液脱とは、骨は屈伸利せざるに属す。

と、『靈樞』五癰津液別第二十六の

三焦は氣を出だし、以て肌肉を温め、皮膚を充たすは、其れ津と爲し、其の流れて行らざるは、液と爲す。

とすれば、「膀胱が津液を蔵する」ことを配慮し、「腦髓を補益するのは液」を勘案して、膀胱と夢で遊行することに関係有りとすることが可能となる。

なお『靈樞』淫邪發夢第四十三の条文の「厥氣が胞臚に客すれば、則ち夢に洩便す」に関して、『靈樞講義』を見ると

『甲乙経』は「夢に洩便利する」に作る。

張介賓曰く「胞は洩脬なり。臚は大腸なり。前に在れば則ち夢に洩れ、後に在れば則ち夢に便す。」

張志聰曰く「胞に客すれば、則ち夢に前溺を洩らし、臚腸に客すれば、則ち夢に後便す。」

明らかに胞は小便との関連から説明しており、上記した条文のように膀胱は夢遊状態と関

連づけており、両者は『靈樞』淫邪發夢第四十三では全く別の概念として把握されていることに改めて注目すべきである。

五、胞の変遷

『呂氏春秋』卷二十三過理には「渉る者の脛を截きつて其の髓を視」や「孕婦を剖きいて其の化を觀る」などいくつかの解剖の記事が見られ、また『漢書』王莽伝によれば、両漢の間に王莽が篡奪して建てた新の頃に（生体？）解剖が行われたという。このような意識的な解剖以外にも、従来より戦傷などによる外傷の手当を介し、ある程度解剖学的な知識はあったであろう。そこで考えられることは、膀胱は本来「津液循環」の生理機能を受け持っていると考えられていたが、その役割は肉眼視できるものというよりは架空の生理的存在であったのではなからうか。ところが解剖により畜尿の場所と認識された臓腑があり、しかもそこに付されたのが「膀胱」の名であったために、従来小便を蓄える臓腑として認識されていた「胞」と、その解剖を経ることで混淆してしまい、何時しか膀胱が畜尿の臓腑と認識されるに至ったのではないだろうか。そこには「女子胞」（子宮）の存在も類似の名として関わっており、結果として後世においては胞は膀胱に吸収合併されてしまい、一部の条文中に名前のみ残ることになったと考えられる。この混淆が医学が理論的にも大きな発展を遂げた後漢以後ということになれば、現存する多くの医書においても、既にこういった変化した考えのもとに記述された部分と、従前の記述を踏襲した部分とが混合しているであろうことは十分に考えられる。

本来「胞」の字義とは、『釋名』によれば、

胞は鞫なり。鞫は空虚の言なり。虚を以て水汐を承けるを主るなり。或いは膀胱と曰うは其の體が短にして横廣なるを言うなり。

であり、世界各地で動物の膀胱を水筒代わりに用いていることから、「鞫」の字義は理解できる。しかも後漢に著された『釋名』に在ることから後漢代に既に誤認が見られていることの証明になる。ちなみに本条文後半で言っているのは、『史記正義』扁鵲倉公伝の膀胱は横なり。胱は廣なり。體短にして、又胞と名づく。胞は虚空なり。虚を以て水液を承けるを主るなり。が参考になろう。

以上をまとめると、胞は解剖学上の膀胱を指し、膀胱は津液を蔵し配布する生理的な働きを有するが、解剖学的な特定の部位に妥当するものではない。

六、津液と三焦の関わり

ここで「膀胱が蔵する津液」は具体的に何を意味するかを考えるために、津液について上記条文を踏まえ、より深く検証する。

『靈樞』五癰津液別第三十六（『黄帝内經太素』卷二十九津液や『鍼灸甲乙經』津液五則第十三に相同の文が見られる）に

水穀は皆口に入り、其の味に五有り、各それぞれ其の海に注ぎ、津液は各れ其の道を走る故に三焦は氣を出し、以て肌肉を温め、皮膚を充たし、其の津と爲る、其の流れて行らざるは、液と爲る。：天寒ければ則ち腠理閉じ、氣濕行らず（『太素』と『甲乙經』は「氣濇にして行らず」、水は膀胱に下溜『太素』は「下溜」、『甲乙經』は「下

流^レし、則ち溺と氣に爲る。

ということ、津液は三焦と深い関わりを持ち、一般認識以上に重要な働きをしているものであることが解る。

五癰津液別第三十六の引き続いての条文として、

中熱すれば胃中の穀を消し、…五穀の精液は、和合して膏と爲り、内には骨空に滲入し、脳髓を補益す。下りては陰股に流れ、陰陽和せざれば、則ち液溢れ、陰に下流し、髓液は皆減じて下り、下ること過度にして虚たら使む。虚の故に腰背^{〔太素〕}は「骨脊^{〔痛みて脛痠す。陰陽の氣道 通せざれば、四海閉塞し、三焦 寫せず、津液化せず、水穀 腸胃の中に并さり、廻腸に別れ、下焦に留まり、膀胱に滲むるを得ざれば、則ち下焦脹れ、水溢るれば則ち水脹と爲る。此れ津液五別の逆順なり。}

とあるが、最後の段に書かれている「三焦瀉せず、津液化せず、穀氣が胃腸中にあり、膀胱に流れていかないと、浮腫・腹水になる」ということは、まさに膀胱が津液の生理に深く関わっていることを示しており、下焦との深い関連性が述べられている。これは初めに書かれている「津液は各れ其の道を走る」とは、肺と膀胱を指していることが解る。

七、三焦について

膀胱と津液の関わりをさらにより具体的なものにするために、「三焦」についてより深く考える必要がある。

『素問』靈蘭秘典論篇第八に

三焦は、決瀆の官。水道焉^{これ}より出ずる。

とある。『説文解字』によれば「決は行流なり」「瀆は溝なり」である。また『五行大義』(隋・蕭吉撰、緯書)には

三焦膀胱は竝びて水の府と爲す。故に以て相配す。

また『靈樞』本輸篇には

三焦は、中瀆の府なり。水道焉^三より出ずる。膀胱に屬し、是は孤の府なり。是は六腑の與合する所の者。

『靈樞講義』はこの「膀胱に属す」を解説し、『素問識』(多紀元簡、一八三七年刊)を引き、桂山先生の意見として、『靈樞』本輸篇にある「腎は三焦膀胱に合す」の三焦も共に下焦のこととし、三焦は篇により意味する内容が異なると記す。これは山田慶児が『中国医学の起源』で三焦理論の発生について記している (pp.414-420) 内容と符合する。

伯高派は消化・呼吸・循環の生理学を具体的に論じ (p.415)、生理学に五行説を導入 (p.355) 一、また『靈樞』卷十邪客の「五穀の胃に入るや、其の糟粕・津液・宗氣は分かれて三隧を為す。」から考えて、「従来は下焦を指していたと思われる (古)

三焦を、上焦と下焦という二つの作用域と考えたのは伯高派であり、更にこれを現在の上中下の (新) 三焦論にしたのは少愈派であり、六腑に含めたのは岐伯派である。

三焦膀胱と併記されていること、下焦が最古の三焦を意味していたという山田の仮説を勘案すれば、上記したように、津液の運行を主る無形 (つまり機能的) 存在としての膀胱は (古) 三焦を意味するものと考えることができ、それは原義的な意味での膀胱の意味を的確に表していることになる。さらに上記したように肺と膀胱が津液の流れに深く関わる臓腑であるというのは、山田の言う三焦理論発展史の上下二焦の名残であるのではなからう

か。

その上に一般には、『靈樞』本藏第四十七の

五藏は、精神血氣魂魄を蔵する所以のものなり。六府は水穀を化し、津液を行らせる所以のものなり。

に見られるように、膀胱のみでなくもつと広く六腑が津液と関わり、特に関わりが大きいと考えられている。これに関連する条文は『黄帝内経』の諸処に見られるが、たとえば『素問』太陰陽明論篇第二十九の

帝曰く脾と胃は、膜を以て相連なるのみ。而して能く之と爲し、其の津液を行らせるは何か。岐伯曰く、…而して氣を陽明にて受け、故に胃が其の津液を行らせると爲す。に見られる如くである。このように脾胃による水穀摂取理論の完成に伴い、中焦が加わり、三焦理論が完成されたと考えたい。

そもそもまだ馬王堆前漢墓医書の時代において三焦の詞はなかったという(7)。それが明確にみられるのは『白虎通』(漢、班固撰、A.D.七九)の「性情」の「右論五性六情」からとされている(8)。

だが『後漢書』卷六十上 馬融列傳第五十上の「先王が府藏を平和にする所以、精神を頤養し、之に致りて疆無し」の注に

韓詩外傳に曰う。人は五藏六府有り。何を五藏と謂うか。…何を六府と謂うか。喉咽は、量腸の府なり。胃は、五穀の府なり。大腸は、轉輸の府なり。小腸は、受成の府なり。膽は、積精の府なり。旁光は、湊液の府なり。

に三焦はなく、『素問』靈蘭秘典論篇の注で森立之は「喉咽者、量腸之府也」がその記述に妥当すると言う。だが「量」には「はかる」に関連する意味しか無く、「量腸」とは「腸の(重さ、長さ)をはかる」ことであろうが、その意味するところから三焦と結びつけるのは、三焦を有形と考える場合に、腸間膜などがその候補になることと関連するのだろうか。さすがに「腸」の字句からも下焦から始まったと推測される三焦の理論発展に矛盾しないが、何故に「喉咽」と呼ばれたのであろうか、これではいかにも上焦と関連するかの如くであり疑念は残る。むしろ膀胱が古義において三焦を意味していたと考える方が問題がないことになる。

さらに「旁光者、湊液之府也」の「湊液」の用例を諸子百家で探ると、もつとも意味合いとして関連しそうなものが『文選』卷第十二江海・海賦にある

春秋元命包に曰う：水は、五行焉より始まり、元氣の湊液なり。

である。湊は『廣韻』に倉奏切^{co}、津は將鄰切^{jin}であり普通の可能性はない。意味的には諸橋によれば

津：わたしば、きし、つて、つたえる、しる(つば、あせ、なみだなど)、うるおう、しみでる、天の川、

湊：あつまる、みなと、人や物の集まる所、おもむく、むく・むかう、はだのきめと、相同とは考え難い。白川『字通』によれば、『文心雕龍』(梁)養氣に「湊理」の字句有り、腠理と同意という。また津は正字は「津」。『説文』で「水渡なり」とするのは別義の字とする。鍼を以て皮膚を刺し、そこから津液がにじみ出る意を表すのが「聿」であるという。「湊液」を腠理に集まる(流れる)液と見なせば、腠理を流れるのは衛気

であり、広義の衛氣Ⅱ広義の氣Ⅱ狭義の津液＋狭義の氣と見なすことは可能であり、湊液と津液を同義と見なすことに問題は無からう。

ここで尿の起源物質に関し(9) 触れておきたい。森約之は『素問攷注』の中で尿は、血滓と津滓と液滓なり。乳も亦 液と津と血、三合する者なり。と、興味深い結論を下している。

また『諸病源候論』諸淋候を見ると、

諸淋は腎虚に由り、膀胱が熱する故なり。膀胱と腎は表裏爲り、俱に水を主り、水が小腸に入り、胞に下り、陰を行り洩便と爲るなり。腎氣は陰に通じ、陰は津液下流の道なり。

と、泌尿器の総括的な考えを述べ、続いて

若し飲食不節し、喜怒 時ならざれば、虚實調わず則ち府藏和せず、腎虚に致りて膀胱熱するなり。膀胱は津液の府、熱すれば則ち津液内に溢れて辜に流れ、水道通ぜず、水は上下ならず胞に停積す。腎虚なれば則ち小便數となり、膀胱熱し、則ち水下るに澀り數となりて、且つ澀なれば則ち淋瀝して宣せず、故に之を淋と爲すと謂い、其の状は小便出ること少きも、數ばかり、小腹弦急して痛みは臍に引く。

と病理状態を述べている。基本的に尿漏れは膀胱の虚寒により、淋は熱により生じる。飲食不節や七情内傷が腎虚と膀胱熱の原因として採られているのは、種々の泌尿器系疾患の原因を考える上で、単に感染に注目するだけではいけないことを示し重要である。

この中で、「流於辜」の意味は不分明であるので検討し注記した(10)。ただ小便との関連から言えば、「膀胱熱が辜を介して小腸熱を生」むことに関連しており、辜に関してはこの言葉が鍵詞であろう。

八、腎について

ここで「腎」について検証する。古典にも「腎是水臟」とか「腎は二便を主る」と言われるように、腎と小便との関連を思わせる記述はあるが、必ずしも泌尿器としての役割を述べたものではない(11)。ただ腎の寒熱が種々の尿病変を来すことは種々の条文から理解される(12)。

『素問』標本病傳論篇第六十五には、

腎病は、少腹と腰脊痛み、筋痠し、三日で背脇筋痛み、小便閉となり、(さらに)三日で腹脹り、(さらに)三日で兩脇支痛み、(さらに)三日で已まざれば死す、冬ならば大晨(夜明け頃)に、夏ならば晏晡(夕刻)に。

ここでは腎病により小便排出に異常が出ることが説かれている。「筋痠」は『千金方』では「脛酸」に作るように、脛の重だるさを言う。だがその他の「腎熱病」「腎瘧」「腎効」「腎風」「腎痺」「腎雍」「腎脈急」など『黄帝内経』には腎に関した疾病が記述されているが、いずれにも小便に関連する記事ではない。

ただ『素問』水熱穴論篇第六十一には、検討すべき条文がある。

帝曰く、腎は何を以て能く水を聚めて病を生じるか。岐伯曰く、腎は胃の關なり。關門利せざれば、故に聚水して其の類に従うなり。

「腎は胃の關なり」という文に関する張志聡の解釈を引用すると、

關とは、門戸要會の處にして、啓閉出入を司る所以なり。腎は下焦を主り、二陰に開竅す。水冥は胃に入り、清なるは前陰由り出で、濁なるは後陰由り出ず。腎氣化せば則ち二陰通じ、腎氣化せざれば則ち二陰閉す。腎氣壯んなれば則ち二陰調い、腎氣虚なれば則ち二陰禁せず、故に腎は胃の關と曰うなり。

このように小便製造に、さらにその排出にも腎氣が大きく関わりと解釈されている。また『金匱要略』の利尿に関連する条文として、水氣病脉證并治第十四の

腎水は、其の腹大きく臍は腫れ、腰痛み、溺を得ず、陰下の濕は牛鼻上の汗の如し、其の足は逆冷し、面は反つて瘦せる。

が有る。この条文は一般に、上記した「腎は胃の關」と関連づけて説明され、いずれも尿製造との関連が説かれている。

ちなみに腎は、上記した逆調論篇第三十四の「腎は水藏にして、津液を主り」が気にかかるが、これはその上の「水は津液に循いて流る」を受けたものであり、『黄帝内経』において、他に腎と津液の関連を述べた条文は以下の一条文のみであり、その関連性は強くないと言える。

腎は冬を主る。足少陰・太陽の主治なり。其の日は壬癸。腎は燥を苦しむ。急ぎ辛を食して以て之を潤す。腠理を開き、津液を致し、氣を通ずるなり。

〔素問〕藏氣法時論篇第二十二

滑寿は終わりの九字は、おそらくもと注の文であろうという。とすれば腎と津液の関連を述べた文は『黄帝内経』の中で逆調論篇の文のみと言うことになる。

九、小腸

小腸に関しては胃の穀氣を受け、それを分別して精濁とし、清なる部分是小便として胞に送り、濁なる部分は大腸として大腸に送る働きをしている。一方内熱などにより膀胱の津液運行に障害が出ると、津液不足の結果として乏尿を来すこと、逆に裏寒があれば、小水過多になることも、小腸と膀胱との関連から説かれている。腎はこの全体の動きを大所高所から調整していると考えて良いであろう。詳細は注記(13)した。

【まとめ】

- 一、「膀胱は、津液を藏する」の「津液」を通して「膀胱」の原義について考察した。
- 二、「胞」は解剖学上の膀胱を指し、「膀胱」は津液を藏し配布する生理的な働きを有するが、解剖学的な特定の部位に妥当するものではないと考えた。
- 三、津液の運行を主る無形（つまり機能的）存在としての膀胱は、歴史的に三焦の古体である（古）三焦を意味しており、現代の下焦に通じる。それは原義的な意味での膀胱の意味を的確に表している存在である。
- 四、「脳髓を補益するのは液」を勘案して、膀胱病に際し夢遊することを説明した。
- 五、州都について概説した。
- 六、「膀胱熱が辜を介して小腸熱を生」むことに関連して、「辜」に関して考察した。
- 七、小便製造やその排出にも腎氣が大きく関わることは、「腎は胃の關」と関連づけて説明しうる。

八、小腸に関しては胃の穀氣を受け、それを分別して精濁とし、清なる部分は大腸として胞に送ると説明できる。

九、腎はこの全体の動きを大所高所から調整している。

【注及び文献】

1、本条文の森立之案語に

「氣化則能出矣」とは、氣が化せざれば則ち尿出る能わざるを言う。尿の出るは、全て胃腸の氣が化するに由るなり。

更に森約之案語に

膀胱の津とは尿なり。其の液は交合時の腎精なり。就中 津は脬に在り、液は胞に在るなり。

とある。しかし父子の意見ともに「津液を蔵する」を尿と関連づけて解釈しており問題であり、特に森約之の津液の解釈は、その考えの典拠がいずれにあるか不明であるが、牽強付会の謬りを免れまい。

2、「膀胱決難」は『孝經援神契』の

肝は仁、肺は義、腎は志、心は禮、膽は斷、脾は信、膀胱は難しきを決する。

を受けての言であろう。

3、張介賓の説

凡そ此の胞の字は、皆 以て子宮の言と爲すなり。此節に膀胱の胞と云うは、以て溲脬の言と爲すなり。蓋し胞には二有り、而るに字は則ち相同にして、人辨じ難きを恐れん。故に本篇に在るは、特に膀胱二字を加え、以て此れは子宮に非ざるを明らかにし、正に其の疑いを辨せんと欲するに似たるのみ。後人其の意を解さざるを奈何せん。遂には膀胱と胞を二物為りと認め、故に類纂に則ち「膀胱は胞の室」と曰う在り。王安道は則ち膀胱は津液の府為りと曰う。又 胞は膀胱の室に居するの説有り。不經に屬さざること甚だし。夫れ脬は即ち膀胱、膀胱は即ち脬なり。焉ぞ復た一物有るを得んや？

4、森立之『素問攷注』の説

王（冰）、楊（上善）、張（介賓）等は直ちに「胞」を以て旁光と爲し、一いは胞の義と名づく。恐らく是に非ず。若し是を旁光の一名と爲せば、胞は則ち下文の「少腹旁光」の文と通じ難きなり。

《示從容論七十六》に「脾胞膀胱」と云うを宜しく併せ考うべし。

また彼の言う『素問』示從容論第七十六を見ると、

六府とは、膽大小腸脾胞膀胱なり。

と有るが、ここで言う「脾胞の脾とは即ち三焦」と森立之は同じく『素問攷注』案語で言う。これを踏まえてかつて論考した。小高修司：脾、三焦説の論考『季刊内経』一五三―四二〇頁、二〇〇三年冬号

5、また『素問』宣明五氣篇第二十三の「膀胱 利せざれば瘰癧為り、約せざれば遺溺為り」。に見られる「瘰」は古字であり、「淋」と同じ意味である。『三因極一方論』（南宋、陳言）によれば、本来の『素問』では「淋」は使われておらず、運氣七篇の「六元正紀大論」で初めて使われたという（森立之）ことだが、『諸病源候論』では用いられている。

6、『素問・痺論』第四十三の森立之案語は、

「胞」は精室為り。于膀胱の後に著在す。女子は則ち子宮を以て胞と為すなり。《吳》《馬》の説は此の如し。従う可し。

と、改めて胞の定義を行い、上記した馬蒔の説を認めている。

『素問攷注』の森約之の注によると、

李中梓の『頤世微論』藏府圖によれば、肝は右に在り、脾は左に在り、旁光の前に胞が有る。

と、膀胱の前に胞があると書かれているらしい。

「按之内痛、若沃以湯」は『素問識』（多紀元簡、一八三七年刊）によれば

『百病始生篇』に云う「積は其の伏衝の脈に著しきは、之を揣手に應じて動く。手に發し則ち熱氣兩股に下る。湯沃の状の如し」と。並びて肌熱の状を言う。

森立之はこの説は、『黄帝内經太素』や『全元起本』が「内痛を兩脾に作る」ことを参看した意見であるという。

森約之の注では、

湯を以て之を沃ぐが如しとは、則ち兩脾股間の中心の筋が之に絡するに際し、忽ち火箸或いは之に湯が入るが如き状は、熱痛堪える可からず。脚氣の病が往往にして此の症有り。『識』が以て肌熱の状と為すは是に非ず。

と、熱痛するのは肌でなく、大腿内の筋であるとする。

また「上れば則ち鼻より清涕出ずる」を森立之は『素問・示從容論』の条文を引き、解説して

是 鼻涕口唾は、皆 是水飲の餘波の及ぶ所と知るなり。

と記す。

7、魏啓鵬他撰『馬王堆漢墓医書校釈（貳）』九三―九五頁、成都出版社、成都、一九九二年、

8、廖育群著『技黄医道』六八―六九頁、遼寧教育出版社、沈陽、一九九一年、

9、尿の起源物質に関する理論

『外台秘要方』卷十一「近效祠部李郎中消・方二首」の

若し腰腎の氣盛んなれば、則ち精氣上蒸し、氣は則ち骨髓に下入し、其の次は以て脂膏と為り、其の次は血肉と為るなり。其餘は別れて小便と為る、故に小便の色は黄、血の餘なり。臊氣は五藏の氣。鹹潤は則ち下味なり。腰腎既に虚冷なれば、則ち上に蒸する能わず、穀氣則ち下に盡きて小便と為る者なり。

を引用し、『素問攷注』では「小便は血の余り」と断じ、更に森約之の案語として

尿は、血滓と津滓と液滓なり。乳も亦 液と津と血、三合する者なり。

と、興味深い結論を下している。

10、臈について

「臈」の字句は『諸病源候論』はここ以外に無く、『外台秘要方』には全く見られず、臈丸のことは「男子陰(卵)」と記されている。だが『脈経』「小腸手太陽經病證第四」には

小腸病は、少腹痛み、腰脊臈に控ひきて痛み、時に之を窘くしむ、復た耳前熱す。若しくは寒甚しくも獨ただ肩上のみ熱し、及び手小指次指の間は熱す。若し脉陷なるは此れ其の候なり。

本条文は『靈樞』邪氣藏府病形第四の条文

小腸病は、小腹痛み、腰脊臈に控ひきて痛み、時に窘しむの後、當に耳前は熱し、若しくは寒甚しく、若しくは獨だ肩上の熱甚しく、及び手小指次指の間は熱く、若しくは脉陷なるは、此れ其の候なり。手太陽の病なり、之を巨虚下廉に取る。

と相同だが、文意は多少異なり、『脈経』の方が意味が分かりやすい。また『脈経』の次の条文には

少腹は臈を控き腰脊を引いて、心上衝し、邪が小腸に在るは、脊に屬する臈の系に連なり、肝肺を貫ぬき、心系に絡す。氣盛んなれば則ち厥逆し、腸胃に上衝し、肝肺を動じて、厥【一いは齊に

作る】に肯結して散ず。

と、「辜系」という用語が見られる。これは『素問識』が「腰不可以俛仰」の注に、吳崑『素問吳注』（一九四四年、二四卷）と張介賓を引用して、

〈呉〉云「其の脈は小腸に屬す。小腸は腰の部分に繋がる。故に腰以て俛仰す可からず」。

〈張〉云「四時氣篇に曰く。邪が小腸に在るは、辜の系に連なり脊に屬す。故に腰は以て俛仰す可からざるなり」。

と説明しているのと同意である。辜は小腸と繋がっていることになり、そのことから推測できるのは、膀胱熱が辜を介して小腸熱を生み、淋となることである。この条文は『鍼灸甲乙經』（三世紀、皇甫謐の氣街穴（＝氣衝穴、足陽明脈氣所發）の条文（以下の『鍼灸甲乙經』関連条文における経穴名の注記は、『黄帝内経明堂』（北里研究所東医研医史学研究部刊、一九九九）を参照した）。

腰痛、辜・小腹及び股に控き、卒俛して仰を得られざるは氣街を刺せ。

との相関が考えられ、陽明経の疾病と考えられていた。また上記した『脈経』の条文は、同じく『鍼灸甲乙經』の

小腹痛、辜に控き腰脊に引き、疝痛し、心上衝し、腰脊強り、溺は黄赤し、口乾くは、小腸愈（足太陽膀胱経）之を主る。

と近似し、こちらは膀胱経の異常と見なしている。

『鍼灸甲乙經』に見られる「辜」に関する治法は、これ以外に

陰疝 辜に引くは、陰交（任脈衝脈少陰之会）之を主る。

腰足痛みて清し、善く偃ぎ、辜跳拳するは、上窳（足太陽少陽之絡）之を主る。

陰跳して腰痛み、實すれば則ち挺長し、寒熱し、擲し、陰暴痛し、遺溺偏大し、虚なるは則ち暴癢し、氣逆して辜腫れ、卒疝し、小便利せざること癰状の如く、…背擲して俛仰す可からずは、蠱溝（足厥陰経）之を主る。

が見られ、経絡の共通性はないが、やはり特に陽明、膀胱、小腸、少陰、厥陰と関連しており、小便に関連する記述は下線部の三カ所にある。「遺溺偏大」は寒熱が不分明だが、それ以外は上記した「膀胱熱が辜を介して小腸熱を生」むことに関連しており、辜に関してはこの言葉が鍵詞であろう。

11、『素問』上古天真論篇第一の文をより詳しく見ると、

腎は水を主る。五藏六府の精を受けて之を藏す。故に五藏盛んにして乃ち能く寫す。

張志聡に学び『素問直解』九卷（二六九五）を著した高世栻の注によると

先天の癸水は後天の水穀を籍りて、以て水を生じる。故に腎は水を主る。水とは癸水であり、五臟

六腑 水穀の化するところの精を受け、腎に之を藏する。六腑の精は五藏に帰し、五藏の精は腎に復帰する。故に五藏は必ず盛んとなり、精は乃ちよく瀉する。

とあり、ここで言う「水」は癸水であるから腎水のことであり、小便とは無関係であることが解る。また

夫れ臥を得ず、臥せば則ち喘するは、是れ水氣の客なり。夫れ水は津液に循いて流るるなり。腎は水藏にして、津液を主り、臥と喘を主るなり。（逆調論篇第三十四）

ここで言う「水」も津液に関わるものであり、直接的には小便とは無関係である。その他、痿論篇第四十四にも「腎者水藏也」とあるが、内熱により腎が傷つくことを述べたもので、やはり泌尿器としての役割を述べたものではない。さらに『素問』における腎病の記述から上の腎の働きを説明すると、藏氣法時論篇第二十二に

腎病は、腹大きく脛腫れ、喘欬し、身重く、寢汗出でて、風を憎み、虚なれば則ち胸中痛み、大腹

小腹痛み、清厥して、意樂しまず。

「清厥意不樂」とは王冰によれば「足が逆冷し、意は隠れた憂い有るが如き」をいう。張志聡は

腎は精を蔵し、精は氣と化し、精虚ならば則ち氣虚、故に清冷厥逆為り。腎の神は志為り、惟れ志

足らざれば、意有るも樂しまず

と注する。ここでは小便との関連は説かれていない。

12、腎の生理を言う詞は『黄帝内経』に多々あるが、腎の小便製造との関わりを考えるには、むしろ病理から検討した方が解りやすい。疾病の病因病理を論じるに当たり参看すべきは『諸病源候論』である。

卷之十五「五臟六腑諸病・腎病候」には

腎氣盛んなれば志 有餘為り、則ち病めば腹脹り、飡泄し、體腫れ、喘咳し、汗出で、風を憎み、

面目黒く、小便黄となる、是は腎氣の實と為すなり、則ち宜しく之を寫すべし。腎氣足らざれば則

ち厥し、腰背冷え、胸内痛み、耳鳴り聾に苦しむ、是は腎氣の虚と為すなり、則ち宜しく之を補う

べし。

とある。ついでながら、これを読めば「腎に実証無し」という説が誤りであることが明らかとなる。腎実による様々な病態が記されており、水液代謝に関わることは理解できるが、直接小便製造に関わる話にはなっていないことに留意したい。

次に種々の尿症状を検証する。卷之十四小便諸病凡八門を順次見てみよう。まず「小便利多候」には小便利多は膀胱虚寒にして胞滑かに由る故なり。

尿量の増加は虚寒と胞が関わることに解つたが、「胞滑か」は意味がはっきりしない。胞と膀胱については後で検討する。次いで「小便數候」には

小便數は膀胱と腎と俱に虚にして客熱有りて之に乗ずる故なり。

頻尿は膀胱と腎の虚とそれに乗じた内熱が問題となる。「小便不禁候」では

小便不禁は腎氣虚にして下焦 冷を受けるなり。

排尿が我慢できないのは、腎氣虚と寒邪侵入による。「小便不通候」は

小便不通は膀胱と腎と俱に熱有るに由る故なり。腎は水を主り、膀胱は津液の府為り、此の二經は

表裏為り、而して水は小腸を行り胞に入りて小便と為る。

ここに小便が作られる機序が明記されているが、「水」の意味を検討する必要がある。「小便難候」は

小便難は此 是は腎と膀胱の熱の故なり。

「尿淋候」は

夫れ人が眠睡し、覺えず尿出ずる者有り、是は其の稟質の陰氣が偏つて盛んで、陽氣が偏つて虚のために、膀胱腎氣俱に冷え水を温め制する能わず、則ち小便多く或いは禁ぜずして遺尿す。膀胱は足太陽なり腎の府為り、腎は足少陰為り、藏と膀胱が合して俱に水を主る。凡そ人の陰陽は日入りて陽氣盡きれば則ち陰が氣を受け夜に至る。今陰陽大會し氣交り、則ち臥睡すれば小便は水液の餘なり。膀胱從り胞に入りて小便と為る。夜に臥せば則ち陽氣衰伏して陰を制する能わず、陰氣は獨り發し、水下るを禁ぜざる所以にして、故に眠睡して覺えず尿出ずるなり。

夜尿は腎陽虚(陰盛)を基本体質とするものが、陰氣盛んな夜間に陽氣が陰を制することが出来ず生じる。

13、『素問』靈蘭秘典論篇第八

小腸は、受盛の官。化物出るか。

この条文に関しては、『素問攷注』の森約之の注が妥当する。

「化物」とは尿尿なり。尿は小腸より出て之を大腸に去り、尿は亦た小腸より出て之を膀胱に去るなり。

これは『黄帝内経素』卷第五人合十二水(上記した『靈樞』本藏第四十七と類似条文)の

六府は穀を受けて之を行らし氣を受けて之を揚ぐ。
に対する楊上善の注

胃は五穀を受け成熟し小腸に傳入す。小腸は受を盛んにするなり。小腸は大腸に傳入し、大腸は傳導するなり。大腸は廣腸に傳入し、廣腸は傳出するなり。胃は汁を下別し、膀胱の胞に出る。陰に傳え下に洩れるなり。膽は中精為りて、木の精と三合有り、藏して寫せず。此れ即ち五府は穀を受け之を行らすものなり。五府と三焦は氣を共にするが故に、六府は氣を受け三焦は之を行らし原と為す、故に揚と曰うなり。

と関連して読むべきである。胃は小腸を介して、飲食より水穀の精微を吸収した残りを更に分別し、胞と大腸・廣腸を尿と大便にする働きの場所として重視したことは特記すべきであろう。このことは、上記したように『諸病源候論』「小便不通候」にも

水は小腸を行り胞に入りて小便と為る。

と、小腸から胞に入り(上記したように胞と膀胱の概念の混乱があるために、一般には更に「膀胱を経て」と考えられている)排泄される。

『諸病源候論』傷寒小便不通候には、

傷寒發汗の後、汗出でて止まらず、津液少く、胃中極めて乾くは、小腸に伏熱有り、
故に小便通ぜざるなり。

とあり、発汗過多による津液欠乏が、小腸に内熱を生じ、結果として乏尿を来すことが明記されているが、こちらは津液の運行を主る膀胱が津虚によりその働きを失調した結果である。同様の論は「時氣小便不通候」などにも記されている。

また「小腸病候」を見ると

水液 下行し洩便と為るも、小腸に流れ、其の氣盛んにして有餘為れば、則ち小腸熱を病み、焦竭して乾瀆し、小腹脹す。是は小腸の氣實する為り、則ち宜しく之を寫すべし。小腸不足は則ち寒氣之に客し、腸病は驚跳して言わず、來るかと思えば急に去る、是は小腸氣の虚と為すなり、則ち宜しく之を補うべし。

と、小腸の氣の虚実によって、熱寒邪が侵入して種々の症状が起きることが記されている。また「脚氣腫滿候」には

此れ風濕毒氣が腎經を搏てば、腎は水を主るに由り、今 邪が搏つ所と為り、則ち腎氣は水液を宣通する能わず、水液 小腸に傳わらず、府藏は壅滯するに致り、府藏は既に皮膚の間に浸積するが故に腫滿するなり。

と腎經に風濕邪が侵入すれば、水液代謝が失調して小腸に伝わらず浮腫を来すことが説かれている。十水候には

十水候とは、∴暴水(『外台秘要方』は裡水)は先ず腹滿し、其の根は小腸に在り。∴皆な榮衛が否澀することに由り三焦が調わず、府藏が虚弱にして生ずる所は名證が同じからずと雖も、並びて身體は虚腫し喘息上氣たら令め、小便黄澀なり。

と、小腸を初めとする各臟腑の失調による種々の症状が説かれている。ただその侵された臟腑により病名は異なっている、実際は浮腫・喘息や小便の異常である。

謝辞：林克教授には懇切なご意見を賜った。茲に深甚の謝意を表する次第である。